

2021年9・10月号

2021年11月20日発行

NPO 法人 わっか

月次報告書



32



## だれもが、まるごと受けとめられる社会をつくる

わっかは、だれもが、まるごと受けとめられる社会を目指して活動を行う団体です。

## 子どもを取り巻く環境について

子どもたちは、思うがままに過ごす時間や、まるごと受けとめられる経験が少なくなっています。いまの子どもたちは、自分では変えることができない社会環境や大人の意識の変化により「思うがまま」に過ごす時間や、まるごと受けとめられる経験が少なくなっています。

大人の価値観による評価、他者との比較や数字で表せる結果で、

子どもの存在を条件付きで認める場ばかりになり、

さらには、地域社会においても、

その子のまるごとを受けとめてくれる存在も少なくなっています。

また、学校、学習塾、習い事、スポーツクラブで多忙な毎日を送り

仲間も時間も空間もなくなりつつあります。

「わっか」は、2014年3月から活動をおこなっています。

活動当初は、月に1回冒険遊び場を、びわ湖のほとりで行っていました。

そこに来てくださる方の声に応えたくて2015年7月から、古民家の開放をはじめました。

毎週月曜日の放課後、日曜日は月に1、2回開けることから始めた古民家開放は

わっかを通じて出会った人の声に応えるように、活動の幅を広げています。



## 第三十二号

### 目次

学童保育とは？シリーズ⑤	柳生のび	4
若者を取り巻く環境について 第五回	佐藤真紀	5
お弁当・おかずづくりを通じて	あすか	7
<b>事業報告</b>		
月ようわっか		8
平日わっか		9
日ようわっか		10
9・10月にいただいたご寄付		11
編集後記		12

## 学童保育とは？シリーズ⑤ わっかののびが語る学童保育の世界 柳生のび

おばちゃんは、常に学童のこと考えていたという。夜寝ているときも、ふとアイデアが浮かぶと、飛び起きて、メモに残して、すぐ実践していたそうだ。また、勉強の熱心だった。様々な文献を読みあさり、気になったら現場を見学にも行って、直接見ていた。そんなおばちゃんの最たる取り組みが10日間の廃村キャンプだ。これは、ボクがこの学童に就職した頃には既に行われていなかった。聞くだけで凄まじい雰囲気企画だ。10日間も、廃村でキャンプ！？ちよっとビックリすぎて想像もできない。

具体的にどんなことを実施するのか。基本的には10日間、廃村で暮らすことが大きな目的だ。もちろん、電気もガスも水道もない。ライフラインは一切当てにできない生活。これは、かなりハードだ。寝るところは、廃村になった地域に残っていた体育館施設を活用していたらしい。廃村なので、誰も掃除をしないため、利用するときはホコリまみれで、まず、徹底的に掃除をするところから始まる。当時、クイックルワイパーとか気の利いた物もないため、雑巾がけを繰り返した。それができたら、今度は、水の確保だ。井戸水はあったらしく、それを何度も汲み上げて、持ち運びできるタンクに貯めて、必要分の水を確保していた。火もないので、かまどを、土を練って自分達で作った。食事は、基本、このかまどを使って作る。自分達が10日間暮らす生活の場を整備するだけで1日は終わる。1日の大半は、生きて暮らすために必要な作業をこなすことになる。洗濯も自分達で行う。もちろん、洗濯機などないし、あっても電気がないので役に立たない。昔ながらのやり方で、洗濯板を使って自分達で手洗する。お風呂もないので、水浴びかお湯を沸かして、体をタオルで拭くぐらいしかできない。

さすがに、食材の確保は山から人数分を調達するのは難しかったので、麓の地域まで買い出しに行っていたようだ。しかし、ここで手を抜くことはしない。車などは使わず、歩いて買い物に行った。片道2時間近くかかる道のりを歩き、麓のスーパーで必要な食材を買い出しして、それをまた、同じ道のりを買い出した荷物を両手にキャンプ地まで歩いて戻った。

まさに、「忍耐」と「挑戦」の連続だ。おばちゃんは、子ども達と徹底した非日常の中で暮らすことにこだわった。それを陰から支えていたのは、子ども達の親だった。親たちは、このキャンプ地にスタッフとして代わる代わる毎日やってきてくれて、子ども達の活動を支えてくれていた。おばちゃんは、いつも言っていた「親さん達がいないと、こんなことはできないよ」と。おばちゃんの、子どもを成長させるためにはどうしたらいいかという飽くなき探究心とそれを支える親たちの共感と思いがあつたからこそ実現できた企画なのだ。

ここまでの話は、廃村キャンプのほんの一部分にしか過ぎない。あくまで、ボクがおばちゃんから聞いた話の範囲で語っているだけであり、もっと、たくさんエピソードや取り組みがあつただろうが、何分おばちゃんは手を抜くことをしない方だったので、この話以外にも多くのことを伺っていたため、キャンプの詳細やその細部まで伺うことはできない。ただ、恐らく、そうしていただろうと思われる点で、一つ挙げておきたいことがある。それは、発達障害など障害がある子ども達も一緒に廃村キャンプに参加していた点だ。それこそ、落ち着きもなく、学童に入所した当時は、トイレもまともにできない状態だった子もいたことは聞いている。そういう子ども達も、40年以上前から受入れて、保育の中でその子達の育ちも保育の中で保障していたという。次回は、この学童での障害がある子との関わりについて話したいと思う。



## 若者を取り巻く課題について(全12回)

### 第5回

親も子も下着をどう選んでいますか

佐藤真紀

今回は「親の就労」とテーマ予告していましたが、ヒルズで行われたFemTechFes! 2021に触発されてテーマを変えてみました。FemTechとは、「FemTech (フェムテック)とは、Female (女性)とTechnology (テクノロジー)をかけあわせた造語。女性が抱える健康の課題をテクノロジーで解決できる商品(製品)やサービスのこと」\*1です。

数年前からナプキンを使用しない生理用ショーツ、セルフブラジャー用のプロダクトが普及し始めていますが、今回の会場では自宅で人工授精ができるキットがあったり、ブラジャーに装着できる搾乳機があったり(アプリで前回の搾乳量や時間なども自動記録)と、膣に挿入する尿漏れ対策キットがあったりと、生理関係やセルフブラジャー以外にもかなり「女性の健康と生活の向上」が進んできた印象です。そして、それらすべてが「O」で連動させており、データや動作は手元のスマートフォンから行われていました。ただし、こうしたプロダクトはどれも手に入るわけではなく、まだまだアクセスの困難さは残っています。普及し始めた生理用の吸水ショーツも「O」の1400円台が最安ですが、だいたい1枚4000円前後へとなっています。中々手が出ないですね。

そうしたプロダクトの前提となるものが「下着」であったりしますが、みなさんは自分にとって適切な下着を選択しているでしょうか。高橋らが女子大生・大学院生を被験者とした平均年齢21.7歳を対象とした調査\*2では、「ブラジャーの平均価格は、1887円(最低500円、最高5000円)であった」とのことであり、10倍近い差が出ています。ちなみに、周囲にリサーチしたところ、男性は3枚1000円程度が多いようで、身体性による経済的負担の男女差が如実に表れます。この点は男女の収入格差だけでなく、負担せざるを得ない経済負担に関しても同時に論じられるべきことでしょう。

そして、なにより適切なサイズを着用しているかです。その点は「バストを採寸する頻度は、ブラジャーの購入時18.9%、ほとんど測らない5.6%、計ったことがない20.8%、その他37.7%」試着する頻度は必ず試着する11.3%、時々試着する26.4%、あまり試着しない24.5%、試着したことがない37.7%で、ほとんど測らない、計ったことがない層は77.4%、あまり試着しない・計ったことがない層は62.2%で、あまり関心を持っていないことが本調査では明らかにされています。

ただし、同調査ではブラジャーのカップサイズ、アンダーバストの身体との不一致も指摘されていることから、過去に試着や採寸をしたけれども合わなかったことから、現在は試着も採寸もしないという消極的理由は否定できません。同調査では「38%が販売員の資格を持つ者が選定したサイズと一致」とのことでしたが、これは62%の被験者が一致していなかったとも言えます。

友人のフィッターや下着ブランドを展開している知人がいますが、下着の話をすると数か月でも変化をするし、年齢によっても変化する、商品によっても付け心地が異なるので、必ず採寸と試着はしてほしいと話します。ただし、若年者だけでなく普段から身体のサイズを採寸する機会に恵まれていないのも事実で身体サイズを自分で把握していないことも課題かもしれません。また、育乳ブラも近年できていますが、横井らの調査\*3によると「育乳ブラには、裸体での人体寸法計測値に現れるような豊胸を実現する効果はない」「着用したときのみ、見た目の豊胸を実現する効果はあると推察される」としており、SNSなどのPR広告で安易に選ぶのではなく、正しい情報を正しく手に入れるリテラシーも必要とされるでしょう。

では、大学生や大学院生よりも金銭面や機会面、情報面で自分の意志で選択・決定する機会が少なく、親に左右されやすい子どもはどうでしょうか。二次性徴期を念頭に置くと、成長がある程度終わった大学生世代よりもその必要性は高いはずで、

親が40代、子が10代〜20代と仮定すると、その下着選択にはおのずと差異が出てくるはずで、鈴木らの論考\*4では「もっとも選択されたのは「かわいい」「であり」と大きな差はなかったが、誰の目が気になるかなどは年代によって大きな差がみられている。特に下着選択時の「かわいい」を重要視するのは18-24歳で70.9%、24-29歳で54.4%であるのに対して、親世代と推察できる30-39歳世代では44.7%、40-49歳世代では24.8%と変化する。「シンプル」は逆に年齢が上がるほどに、選択時の選択肢にはいることが調査結果から明らかされています。

また、お気に入りの下着を着用したいと思う場面でも顕著な差が表れており、18-34歳では62.6%、24-29歳では61.2%が「好きな人に会うとき」と選択していますが、30-39歳では51.9%、40-49歳では32.5%、50-59歳では18.4%と変化しています。

もちろん、ライフスタイルの変化も大きな変数だと言えますが、これだけ各種の数値が異なれば、親が子に購入する際にも影響が出るのではないのでしょうか。

そうした前提を元に親子関係に着目してみましよう。教育家庭新聞によると親子で下着に関する話をするのは30%に留まっています。ただし、他方で子どもが下着を買いに行く相手は「親」が圧倒的です。そこで、庄らは\*5中学生、高校生、大学生の下着素材や装着理由の認識の程度に違いがあり、小中学校における早期の下着教材の必要性がある先行研究を下敷きとし、母子関係に着目し、その意識や行動実態を明らかにする調査を行っています。

調査結果では、そもそも乳房の発達に関しての母子の知識不足があげられ、各段階で子の89.94%が「知らない」と回答し、母の46.645%が体験してきた過程であるが「知らない」と回答しており教育機会の欠如を示唆する内容となった。母子保健の分野では乳幼児期に関しては手厚く保健師が関わったり、病院が関わったりするが、小学生以降となるとそうした機会も減り、必然的に情報へとアクセスする機会も減るのかもしれない。

ただし「ブラジャーについて学校で教えること」については子の46%、母の79.5%が教えてほしいと回答している他方で、子の53.9%が教えてほしくない・あまり教えてほしくないと回答しており、「自分のはずかしいことが知られてしまうから」「家の人と相談したほうが安心するから」「家で実践したほうがいいと思うから」と自由記述でもあげられていることから、下着という極めて私的な部分に踏み込むことについては、学校も家庭も慎重になることは必要であると思います。

単純に、あんまり知られたくないですよね。前述の通り値段の差もあり、経済的余裕の有無にも直結しますし。若年者が自身の身体に対してコンプレックスや「あるべき像」を持ち痩身に取り組むことは保健分野でも課題として挙げられてきたが、その前提として自身の身体に関して正しい知識と実践が行われていないことが明らかになったと思います。特に試着や採寸は文献には現れなかったものの、身体侵襲が伴っただけに心的ハードルが極めて高いものであり、購入の際にもフィッティングへの回避行動へとつながるものではないでしょうか。

そこで高校生世代にとって購入相手の一番の同行者である「親」が知識を持ったり、恥ずかしくないということ伝えていくことが求められているのではないのでしょうか。ただし、そこにも年齢による趣向が異なることを前提に、決して押し付けではなく、子どもの着用したい下着を選択することもボディイメージを向上させることにつながるのではないのでしょうか。もちろん、発達段階によつての着用する下着種類は異なり、その点は留意しつつとなりますが。

そうした「選択をする」ということは、前提として「選択できる環境」と「知識」が必要になります。豊胸ブラの項目でも触れましたが、企業の広告が必ずしも正しいわけではありませんから、ここでは母子保健の観点で世代別に学校教育で取り組んでいくことも一つの解決策になるのかもしれませんが。庄らの調査で出てきた「自分のはずかしいことが知られてしまうから」教えてほしくないという声も大切にしながら。

また、今回も解いた調査では下着の選択や母子の知識といった部分に着目しましたが、例えば身体性が女性で、自身の乳房に対して忌避する人や、身体性が男性で女性への変化を望む人などへの「親の対応」に関しては調査資料不足であり、相続して取り組んでみたい課題です。

\*1 Ideas for good(<https://ideasforgood.jp/glossary/femtech/>)2021.11.12取得

\*2 高橋 美登梨、佐藤 百恵、川端 博子(2020)「若年女性におけるブラジャーのサイズ選択の美態」日本家政学会誌/71巻6号

\*3 横井 孝志、春口 佳苗(2017)「育乳ブラ」の長期装着に豊胸効果はあるか?」人間工学/53巻 Supplement1号

\*4 鈴木 公啓、菅原 健介、完甘 直隆、五藤 睦子(2010)「見えない衣服—下着—についての関心の実態とその背景にある心理的効用—女性の「下着」に対する...こだわり...の観点から」繊維製品消費科学/51巻2号

\*5 庄 莉莉、村上 かつお、鈴木 明子(2020)「ブラジャー装着に関わる意識および行動の母娘の関係性」日本家政学会誌/71巻4号

## さとうまき

現場から社会を思考する/コンサル/SW(社会福祉士|精神保健福祉士)/地域:東京⇄岐阜/領域:地方自治|政治|若者|子ども|女性|虐待|地域福祉|生活困窮|学校|LGBTQ/お仕事・ご相談→[info@19hz.org](mailto:info@19hz.org)



おかずマフィンも作る。  
かぼちゃ・レンコンをニンニクで炒めたものを入れてみた。  
プチトマトとチーズをトッピング  
これでもか——！！ ってくらい  
具が入っておる。  
もはや、おかずなのか  
マフィンなのか  
初めて食べたらしいが  
「美味しかった」 いただきました！

なんと、いちぢくを赤ワインで煮てコンポートにし(だからこんな色)マフィンにしちゃうという。なんとも面倒な、そして調子のってますよな。そりゃあ、もう喜ばれる事この上なしのはず。

いちぢく苦手だというのを作ってから思い出す…空回りってこういう事ね。一応聞いたのよ。

いちぢくマフィンどう？って

「美味しく食べれる自信ない」と、、、

お気遣いなくで正直でありがたい

「いらない」って来ない時点で気遣ってくれてるね



無骨なスコーン  
ザクザクを追求しました。

くるみとマカダミアナッツ入り

喜んでもらえたよ



わっかとあすの木 @wacca\_asunoki (Instagram)



いままでのお弁当は、わっかホームページの Instagram で見てね。

毎週 月よう日 16:00 ~ 20:00

子ども 30名 ( 18名 ) おとな 11名 ( 7名 )

# 月ようわっか

( ) 内の人数がご飯を食べた方持ち帰りも含む

毎週月よう日の放課後に必ずひらかれる場です。参加費無料・申込不要。カリキュラムやプログラムは一切なしで「ルールがない」がルールです。子どものみちくさできる場所、子どものたまり場として場をひらいています。

9月6日 子ども 6名 ( 3名 ) 大人 3名 ( 2名 )

メニュー：ごはん、野菜のかき揚げ、かぼちゃの煮物、えのきと豆腐の味噌汁

9月13日 子ども 4名 ( 2名 ) 大人 2名 ( 2名 )

メニュー：パエリア

9月20日 おやすみ

9月27日 子ども 4名 ( 2名 ) 大人 2名 ( 2名 )

メニュー：すき焼き (バースデーリクエストご飯)

10月4日 子ども 3名 ( 2名 ) 大人 1名 ( 0名 )

メニュー：ごはん、豚とキノコの甘辛炒め

10月11日 おやすみ

10月18日 子ども 7名 ( 6名 ) 大人 3名 ( 1名 )

メニュー：ごはん、ハッシュドビーフ

10月25日 子ども 6名 ( 3名 ) 大人 0名 ( 0名 )

メニュー：ラーメン



パエリア



お誕生日リクエストのすき焼き



毎週 火～木曜日 13:00 ～ 17:00  
金曜日 16:00 ～ 20:00

子ども 32名 おとな 13名

## 平日わっか

毎週火～金요일に開いている場です。参加費無料・申込不要。カリキュラムやプログラムは一切なしで、ただ開いている場です。そんな場所に集う人たちと、ゆったりとした時間を過ごしています。



こどもたちが、したいことをする。そのために、周りにいる大人たちができることって、なんだろうかと考えるんです。そんなときに、運営者というよりも、ぼくという視点で考えると、なんとなくこうかなと思えることがあります。

それは、自分が満たされていたら、子どもたちが自由にしている場と一緒にいるのが楽しいなって思えるなってことです。自分に余裕がないと、楽しくしている子供に嫉妬してしまうことがある。

どんなに子どもたちが自由にすごせる場ですよ、って言っても、そこにいる人が、心からそう思っていないと、子どもたちはそれを確実に感じ取るんじゃないかと。

だから、ここにいるときは自分が満たされている、そうするために、ここにいる時間以外を充実したものにすることが大事だろうなって思います。(文責：だいのすけ)

## 日ようわっか

第2、4日曜日のお昼に古民家を開放しています。お休みの日なので、ここに、くるのは小学校高学年までの親子連れが中心です。親子で、きていた子が大きくなったら一人で「月ようわっか」にくるということもあります。

### (報告)

9、10月のうち、開けたのは3回でした。11月からは平常運転で、第2・4と開けられるようにしていきたいです。だからといって、開けたからといって、ほとんど誰も来ない日もあります。それは、ここがいつでも開いているからかなと思っています。今日いなくても、また今度いける、そんな場所だからかなと思います。(文責：だいのすけ)



## 2021年9・10月に頂いたご寄付

---

### 物品でのご寄付 3名（団体）

#### ・古本・でっかいサツマイモ

お子さんが読み終わった絵本などを持ってきてくださいました。これまでも、ときどき、わかかにご寄付をくださっています。ありがたいですー。焼き芋だな。

#### ・野菜（きゅうり、なすなど夏野菜たーくさん）

わかかに来ている子の保護者からいただきましたー。という紹介よりも、マンスリーサポーターとしてわかかを支えてくださっているというほうが、いいですね。いつもありがとうございます。

#### ・素麺、コーヒー、果物など

「賞味期限切れそうだけどいい？」とおっしゃるので「もちろんです！」と。「まだ、素麺あるから」とさらに後日もってきてくださいました。ありがとうございます！

### マンスリーサポーター 30名

荒巻りか、石田智子、大溪麻紀子、後藤基志、佐藤笑代、佐藤すみれ、佐藤真紀、佐藤桃子、柴原隼、鈴木愛子、津田千恵子、永峰美佳、西村、廣部奈緒美、藤澤彰祐、べっかむ、前田諭、マコトヤ、南出吉祥、三輪恵美、吉田尚子（敬称略）

### 都度ご寄付 1名

### 助成・補助団体、応援企業 6団体（2021年度）

米原市、独立行政法人 福祉医療機構、タノシニア合同会社、マコトヤ、紙eco、いっぽまえくら部  
（敬称略 2021.11.10 現在）



## 編集後記

ちょっとお休みがちな、月次報告になっていることとお許しください。わっかの活動は、できる限り毎日開けて、そして開けるだけでなく、一人一人との関わりも、これまでどおり継続しております。古民家を開けての活動も、6年が終わり7年目に入りました。続けているからこそその出来事も起きています。以前、高校生のときに来てくれていた子が、何年かぶりに来てくれてお酒と一緒に飲んだり、駅で、昔わっかに行っていました！という高校生に出会ったり。

活動をずっと続けるとこんなことあるのかなあ、と想像していたことが、1つ1つと起こっています。ぼくらの活動は、そうやってきている人たちによって意味を与えられています。何年か立った時に後から意味を与えてもらえる。

とっても幸せな活動だなと思います。さ、来月はもう12月ですね。あっという間に師走です。

(だいのすけ)

Facebook



こどもと大人の居場所 わっか

Twitter



アカウント名 @NpoWacca

Youtube



アカウント名 振角大祐